

ゆうりやくてんわう
雄略天皇、

いんぎようてい
允恭帝の第五子にして、

あんかうてい
安康帝の同母弟なり。

初め生るゝとき、

しんくわう でん み
神光、殿に満てり。

ちやう がうけん す
長じて剛健人に過ぐ。

あんかうてい にはか やまのみや ほう
安康帝の、暴に山宮に崩ずるや、

おほとねり は へん っ
大舍人、走せて變を告ぐ。

てんわう しよけい うたが
天皇、諸兄を疑ひ、

じうふく へい ひき
戎服して兵を率ゐ、

やつりのしらひこのみこ せま
八鈞白彦皇子に逼りて、

その ゆゑ と
其の故を問へども、

みここた
皇子答へず。

てんわう たち ぬ これ き
天皇、刀を抜きて之を斬る。

またさかひのくろひこのみこ と
又坂合黒彦皇子に問ひしに、

またこた
亦答へず。

てんわう いよいよいか
天皇、愈怒る。

くろひこのみこ おそ
黒彦皇子懼れて、

まゆわのみこ
眉輪王とともに亡^にげて、

おほおみかづらきのおみつぶら たく かく
大臣葛城臣圓が宅に匿る。

てんわう そ たく かこ
天皇、其の宅を圍み、

はな
火を縦ちて

ことごとこれ や ころ
悉く之を焼き殺す。

いちのべのおしはのみこ
十月、市邊押磐皇子・

みまのみこ ころ
御馬皇子を殺す。

きのえね
十一月十三日甲子、

いうし めい
有司に命じて、

だん はつせのあさくら まう
壇を泊瀬朝倉に設け、

てんわう くらゐ つ
天皇の位に即き、

つひ ここ みやく
遂に焉に都す。

これ おほはつせ わかたけのすめらみこと
是を大泊瀬幼武天皇となす。

へぐりのおみまとり もつ おほおみ
平群臣眞鳥を以て大臣となし、

おほともむらじむろや
大伴連室屋・

ものへのむらじめ おほむらじ
物部連目を大連となす。

ぐわんねんひのととり

元年丁酉、春三月三日壬子、

みづのえね

はたひのひめみこ

た

くわうごう

幡梭皇女を立て、皇后となす。

こ かづらきのからひめ

是の月、葛城韓媛・

をぐなきみ

い

ひ

童女君を納れて妃となす。

つちのえいぬ

みづのととり

二年戊戌、冬十月三日癸酉、

えしぬのみや

ぎやうかう

吉野宮に行幸し、

ひのえね

みませ

かり

六日丙子、御馬瀬に獵す。

こ

えしぬのみや

いた

是の日、吉野宮より至り、

はじめ ししひと

べ

始て穴人部を置く。

こ ふびとべ

是の月、史戸・

かはかみのとねり

べ

お

河上舎人部を置く。

かのえね

四年庚子、春二月、

かづらきやま

かり

葛城山に獵す。

つちのえさる

秋八月十八日戊申、

えしぬのみや

ぎやうごう

吉野宮に行幸し、

かのえいぬ

二十日庚戌、

かはかみのをぬ

かり

河上小野に獵す。

かのとうし

五年辛丑、春二月、

かづらきやま かり

葛城山に獵す。

や ちよとつしゆつ

野猪突出して、

まさ てんわう ふ

將に天皇に觸れるれんとす。

てんわう

天皇、

ゆみ もつ みづかふせ

弓を以て自ら捍ぎ、

これ ふみ ころ

之を踏み殺せり。

秋七月、

くだらわう かす りきみ

百濟王加須利君、

そ おとうといくさきみ つか

其の弟軍君を遣はして

い

入りて侍せしむ。

みづのえとら

六年壬寅、

きのとう

春二月四日乙卯、

はつせのをぬ ぎやうかう

泊瀬小野に行幸す。

ひのとゐ

三月七日丁亥、

こうひ みづか かがひ

后妃をして躬ら桑せしめて、

もつ さんじ すす

以て蠶事を勸む。

夏四月、吳國、使を遣はして
貢獻す。

七年癸卯、秋八月、
物部の兵士を遣はして、

吉備下道臣前津屋、

及び其の族七十人を誅せしむ。

是の歳、

吉備上道臣田狹を以て

任那國司となし、

吉備稚媛を納れて妃となす。

是の時、新羅、久しく朝貢せず。

田狹の子弟君、

及び吉備海部直赤尾を遣はして

之を討たしめ、

道を百濟に取りて、

書を百濟王に賜ひ、

技工を獻ぜしむ。

田狭、
たさ

任那に據りて叛き、
みまな よ そむ

謀を弟君に通じ、
はかりごと おときみ つう

之をして百済に據らしむ。
くだら よ

弟君の妻樟媛、
おときみ つまくすひめ

弟君を殺し、
おときみ ころ

遂に赤尾とともに、
つひ あかを

百済の技工を將ゐて歸りぬ。
くだら ぎこう ひき かへ

八年甲辰、春二月、
きのえたつ

身狭村主青・
むさのすぐりあを

檜隈民使博徳を
ひのくまのたみつかひはかとく

呉國に遣はす。
くれのくに つか

是の歳、
こ とし

高麗、新羅を撃ち、
こま しらぎ う

新羅、
しらぎ

救を任那の
すくひ みまな

日本府行軍元帥に請ふ。
にほんふかうぐんげんする こ

みまなわう かしはでのおみいかるが きびのおみをなし
任那王、膳臣斑鳩・吉備臣小梨・

なにはのきしあかめこ い
難波吉士赤目に請ひ、

へい ひき これ すく
兵を率いて之を救はしめ、

おほい こま へい やぶ
大に高麗の兵を破る。

きのとみ きのえね ついたち
九年乙巳、春二月甲子の朔、

おふしかふちのあたへかたふ
凡河内直香賜をして

むなかたのかみ まつ
胸方神を祭らしむ。

かたふ うぬめ かん
香賜、采女と姦したれば、

とら これ き
捕へて之を斬る。

てんわう
三月、天皇、

みづか しらぎ せい ほつ
親ら新羅を征せんと欲せしに、

たまたまかみ をしえ
適神の誨あり、

とど はた
止めて果さず。

よつ きのをゆみのすくね
因て紀小弓宿禰・

そがのからこのすくね おほともかたいのむらじ
蘇我韓子宿禰・大伴談連・

をかひのすくねら つか
小鹿火宿禰等を遣はして

これ う
之を討たしむ。

みことのり
詔して曰く、

しらぎ
新羅は西土にありて、

るゐえふ
累葉、臣と稱し、朝聘時を以てし、

こうしよくあや
朝聘時を以てし、

貢職愆まらざりき。

ちん てんか きみ
朕が天下に王たるに逮び、

み つしま ほか とう
身を對馬の外に投じ、

あと さら おもて かく
跡を叵羅の表に竄し、

こま みつぎ はば
高麗の貢を阻み、

くだら さし の
百濟の城を吞めり、

いはん またてうへいすで か
況や復朝聘既に闕き、

こうしよくをさ な
貢職修むること莫く、

らうし やしん
狼子の野心ありて、

あ さ う っ
飽きて飢り飢ゑて附くをや。

いまいま けい もつ
今汝四卿を以て、

はい たいしやう
拜して大将となす。

よろ わうし もつ
宜しく王師を以て、

つつし てんばつ おこな
慎みて天罰を行ふべしと。

是ここに於おて、諸將しよしやう、

進すすみて新羅しらぎを撃うち、

大おほいに之これを破やぶる。

喙とくの地ち悉ことごとく定さだまりたれども、

餘衆よしういま未ふくだ服ふくせず。

小弓等をゆみら、

再ふたび兵たを督とくして之これを攻せむ。

大伴談連おほともかたりのむらじ・

紀岡前きのをかさきのく來め目連のむらじせんし戰死しして、

両軍りやうぐん交退こもく。

小弓をゆみ、病やみて軍ぐんに卒しゆつす。

夏き五月のおほいはのすくね、紀大磐宿禰きのおほいはのすくね

新羅しらぎに往ゆき、

小鹿火宿禰をかひのすくねの兵へいを奪うばひて

蘇我韓子宿禰そがのからこのすくねを殺ころす。

十年ひのえね丙子ひのえね、秋九月、

身狭村主青むさのすべりあを、吳くれより還かへる。

十一年丁未、
ひのとひつじ

夏五月辛亥の朔、
かのとる ついたち

近江栗太郡上言すらく、
あふみのくりもとのこほりじやうげん
しろきう

白鷺鷥あり、
たなかみのはま あつま

谷上濱に集ると。
みことのり

詔して、川瀬舎人を置く。
かはせのとねり お

秋七月、

呉人貴信、
くれのひときしん

百濟より來りて歸化する。
くだら きた きくわ

十二年戊申、
つちのえさる

夏四月四日己卯、
つちのとう

身狭村主青・
むさのすぐりあを

檜隈民使博徳を
ひのくまのたみつかひはかとこ

呉に遣はす。
くれ つか

冬十月十日壬午、
みづのえうま

木工鬮雞御田をして、
こたくみつげのみた

始て樓閣を起さしむ。
はじめ ろうかく おこ

十三年己酉、
つちのととら

秋八月播磨の三井隈の人文石小麻呂、
はりま みるくま ひとあやしのを まろ
ちから たの けうぼう
力を恃み驕暴にして、

租税を輸らず、
そぜい おく

路人を劫剽し、
ろじん ごうへう
しやうはく だつりやく

商舶を奪掠せしかば、
をぬのおみおおき つか

小野臣大樹を遣はして之を誅せしむ。
かのえいぬ これ ちゆう

十四年庚戌、
つちのえとら

春正月十三日戊寅、
むさのすぐりあをら

身狭村主青等、
くれ かへ

呉より還り、
くれ つかひおよ

呉の使及びび工女漢織・
くれはとり きぬぬひえひめ

呉織・縫衣兄媛・
おとひめ

弟媛と共に來りて、
すみのえのつ とま

住吉津に泊る。

是の月、
こ

呉の使の爲に磯齒津路を開く。
くれ つかい ため しはつぢ ひら

三月、

呉の使を迎へて、

檜隈野に處らしめ、

兄媛を以て大三輪神を奉ぜしめ、

弟媛を以て漢衣縫部となす。

夏四月甲午の朔、

呉の使を饗す。

根使主、

罪ありて誅に伏す。

十五年辛亥、

詔して、

秦氏百八十部を聚めて

秦造酒に賜ふ。

又諸秦氏を役して、

八丈の大蔵を宮側に作り、

大蔵官を置きて、

酒を以て長官となす。

十六年壬子、秋七月、

詔して、桑に宜しき國縣に課して、

桑を植ゑしめ、

因て秦氏を分ち徒して、

庸調を獻ぜしむ。

冬十月、詔して、

漢部を聚め、

其の伴造を定む。

十七年癸丑、

春三月二日戊寅、

贄土師部を置く。

十八年甲寅、

秋八月十日戊申、

物部菟代宿禰・

物部連目を遣はし、

伊勢の賊朝日郎を討ちて、

之を斬る。

十九年乙卯、春三月十三日戊寅、きのとう つちのえとら

穴穂部を置く。あなほべ お

是の冬、高麗、こま

攻めて百済を陥れ、せ くだら おとしい

其の王加須利君を殺す。そ わうか すりきみ ころ

二十一年丁巳、ひのとみ

春三月、加須利君の

弟汶洲を立て、おとうともんず た

百済王となし、くだらわう

久麻那利の地を賜ふ。くまなり ち たま

二十二年戊午、春正月己酉の朔、つちのえうま つちのととり ついたち

白髪皇子を立て、皇太子となす。しらがのみこ た くわうたいし

秋七月、

使いを丹波の輿佐の眞井原に遣はして、つかひ たには よさ まなるのはら つか

豊受大神を奉迎せしめ、とよけのおほかみ ほうげい

九月、之を伊勢度會郡山田原の

新宮に祀る。にひみや まつ

二十三年己未、夏四月、つちのとひつじ

くだらわうもんこむしゆつ
百濟王文斤卒す。

てんわう
天皇、

こんきわう だい
昆支王の第二子末多を召し、まため

まのあたりさと
面踰して、

かへ そ くに わう
歸りて其の國に王たらしめ、

たま へいき もつ
賜ふに兵器を以てし、

つくし ぐんし
筑紫の軍士五百人をして

これ ぬいそう
之を衛送せしむ。

つくし あちのおみ
筑紫の安致臣・

うまかひのおみら
馬飼臣等、

しうし ひき こま
舟師を率ゐて高麗を撃つ。

かとうし ついたち
秋七月辛丑の朔、

てんわう ふよ
天皇、不豫。

みことのみこと
詔して、

ことこさい
事巨細となく、

くわうたいし
皇太子に就きて決を取らしむ。

八月七日丙子、
ひのえね

大漸。
たいぜん

大臣を召し見、
おほおみ め み

手を握りて辭訣す。
て にぎ じけつ

是の日、
こ

大殿に崩ず。
おほと の ほう

大伴連室屋、
おほとものむらじむろや

及び東漢掬直に遺詔して曰く、
およ やまとのあやのつかのあたへ るせう いは

星川王、
ほしかわのみこ

心に悖悪を懐けることは、
こころ はいあく いだ

天下著聞せり。
てんかちよぶん

朕が崩ずるの後、
ちん ほう のち

將に皇太子に不利ならんとす。
まさ くわうたいし ふり

汝等、
いましら

民部甚だ多ければ、
かきべはなは おほ

努力して相助け、
どりよく あひたす

侮慢せしむること勿れと。
ぶんまん なか

是より先、

將軍吉備臣尾代、□

蝦夷五百を將ゐて、

新羅を征す。

吉備に至りしとき、

天皇崩すと聞き、

蝦夷相率ゐて叛き、

傍郡を侵掠す。

尾代、

討ちて悉く之を平ぐ。

天皇、

初め心を以て師となし、

好みて輕しく人を殺し、

史部身狭村主青・

檜隈民使博徳等を嬖辛す。

天下謗りて、

大悪天皇と曰へり。

葛城山かづらきやまに獵かりして、

一事主神ひとことぬしのかみと遇あひ、

轡くつわを並ならべて馳逐ちちくし、

昏くれに及およびて罷やむるとき、

神かみ、天皇てんわうを來目水くめがわに送おくりてより、

百姓ひやくせい、更さらに有徳天皇いうとくてんわうと稱しょうせり。

百濟くだらの采女池津媛うぬめいけつひめ、石河楯いしかはのたてと姦かんす。

來目部くめべをして二人ふたりを執とらへしめ、

手足てあしを木きに縛しばり、

假さ廢ざきの上に置おきて、

之これを燒やき殺ころす。

御馬瀨みませに獵かりして、

大おほいに鳥獸てうじうを獲え、

顧かへりみて群臣ぐんしんに問とひて曰いはく、

獵場かりくらの樂たのしみ、

膳夫かしはでをして鮮せんを割さかしむるは、

自みづから割さくに孰興いづれと。

ぐんしん よ こた
群臣、能く對ふることなし。

てんわう いか
天皇、怒りて、

てづか ぎよしやおほつのおまかひ き
手ら御者大津馬飼を斬る。

みる ものしんりつ
見る者震慄す。

うだ か ところ いぬ
菟田の人の畜ふ所の狗、

てうくわん とり か
鳥官の禽を噛む。

てんわう
天皇、

いかり
怒りて、其の人を黥し、

とりかひべ
鳥養部となす。

とき しなぬ
時に信濃・

むさし まぼろあひいつ いは
武蔵の直丁相謂て曰く、

わ きやうとりおほ つ きうりやう ごと
我が郷鳥多く、積みて丘陵の如し、

なん てう ゆゑ もつ
何ぞ一鳥の故を以て

ひと げい
人を黥せんやと。

てんわう
天皇、

き とり あつ
聞きて禽を聚めて

これ つ うなが
之を積まんことを趣す。

よぼろ
直丁、

にはか べん
遽に辨ずること

あた
能はざりしかば、

ならび とりかひべ
并に鳥養部となせり。

そ げんしゅん
其の儼峻なりしこと此の如し。

かつ こだくみる な べのまね
嘗て木工猪名部眞根を

き み
斬るを見る。

いし もつ しつ
石を以て質となし、

しうじつをの ふる
終日斧を揮ひて、

そ は そこな
其の刃を毀はず。

てんわう これ あや
天皇、之を異しみ、

と いは
問ひて曰く、

いましあやま いし あ
汝誤りて石に中つるなきかと。

こた いは
答へて曰く、

あやま
誤らずと。

すなは うぬめ
乃ち采女をして

らたい すま
裸體となりて相撲はしむ。

眞根、心動き、
誤りて其の刃を毀ふ。

天皇、

其の言の欺妄なるを怒り、
將に之を刑せんとせしが、
其の徒歎惜して、
歌を作り之を諷せしかば、
天皇、

聞きて之を赦せり。

末年に逮び、

心を政事に留め、

圜家無為なり。

河内の丹比高鷲原陵に葬る。
追諡して雄略天皇と曰云ふ。